



▶会場にあふれた参会者

天草上島で移動県政相談ひらく

ことしの移動県政相談は、さる8月26日から3日間にわたって、天草郡上島の松島、姫戸、竜ヶ岳、倉岳、栖本、有明の6町を巡回して行なわれた。

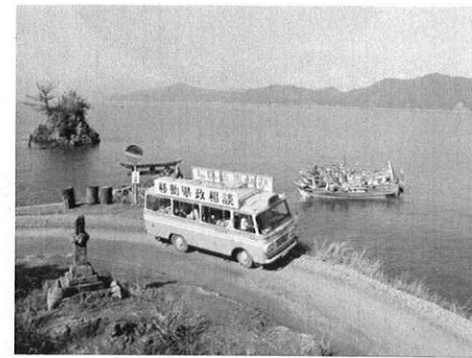
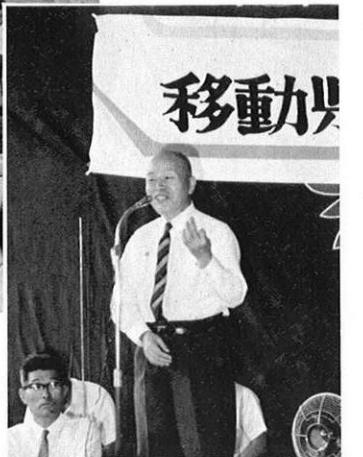
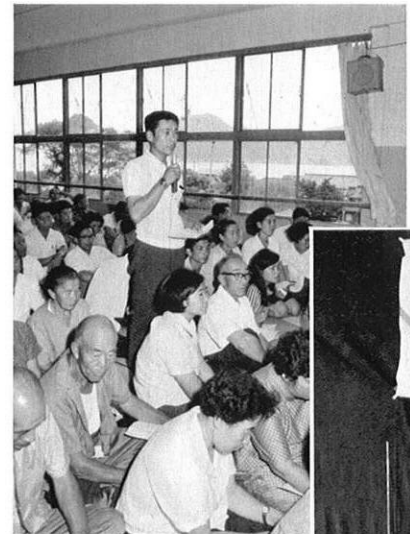
干ばつに苦慮していた天草各地であったが、前夜からの慈雨に恵まれ、各会場とも、ほっとした明るい表情の参会者で溢れ、活発な意見の交換が行なわれた。

過疎対策、これからの天草農業の方向、道路問題、青少年教育など、天草が当面する課題が、次々に提示された。また、これに対して寺本知事も、真剣に答弁を行ない、今後の県政推進に大きな示唆を得た点が、数多くあった。

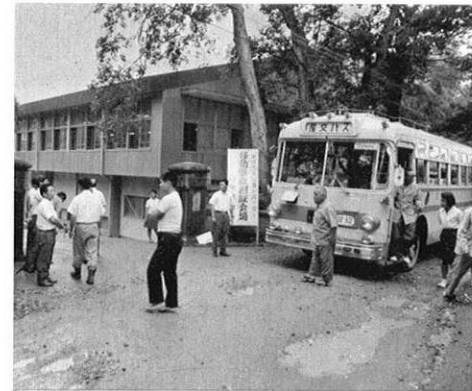
移動県政相談は、これで71市町村を巡回したわけて、県下の遠隔地区は、ほとんど終了したことになる。

◀各会場とも活発な意見が続出……

▼質問者にこたえる寺本知事。



▲栖本一倉岳の海岸道路に行く移動相談のりんどう号。



▲参会者が貸切ハスで繰込む光景もみられた。



▲教良木小学校の生徒も通学道路のことで発言……(松島会場)

△ここに人あり▽

点字は生きています

★下益城郡松橋町
森畑 正士さん

その指先は大きかった。十七年近く、点字を打ち続けてきた重みがあった。松橋町の岡岳町営住宅の一室。両手の動きにつれて、点字タイプライターの七本のキイがめまぐるしく上下に動き、白紙の上に点字が正確に打ち込まれていく。

森畑正士さん(四六)。昭和十六年に熊本通信講習所を卒業。熊本郵便局に勤めたが二十一年に退職。妻の富子さんと現在地近くで果樹園経営をはじめた。仕事も軌道に乗りがかった二十五一年一月、柿のせん定中に森畑さんの腰に激痛が走った。暗い長い闘病生活のはじまりであった。そして二年後には全身不随。病名は脊椎カリエス。医師は、あと数カ月の生命と宣告した。

ギプスに入り、あおむけに寝たまま、顔さえ横に向けることができない毎日が続いた。

「視野の中に入るのは天井だけ。それを見つめていると、天井にあってはいる小さな穴に吸い込まれて行くような恐怖感に、絶えず脅かされてね。」二十七年の春、奇蹟的に手だけがどうにか動くようになった。「目と手が生きています」

森畑さんは、死の不安感からの逃避を点訳に求めた。

病床で修得した点訳技術

日本点字図書館の通信教育を受け、普通は約一年かかるところを、五カ月で点訳許可をとった。「なにしろ、むちゃくちゃに点字板にむかいました」と、森畑さんは当時を回想する。それが真夜中であれ、眼がさめている時は、絶えず点字を打ち続けた。それは、生きていくことの確認でもあった。そして、二十七年十一月、十四頁の第一作、川上三太郎著「鉄瓶」の点訳本が誕生した。

三十一年には、室内での歩行練習もできるまでに回復した。この年、日本盲人福祉協会が開催した「点訳奉仕感謝の集い」の全国表彰に、医師の反対を振り切って、奥さん同伴で上京できたことで、身体への自信を一層深めることができた。点訳もまた一段と進むようになった。

十八万頁におよぶ点字訳

点訳は、はじめは小説ばかりだった。三十年のはじめからは、大学で学ぶ学生のために、専門書の点訳に取り組んだ。「ルッターの根本思想」、「行政法」などである。すでに、点訳は恐怖からの逃避ではなく、責任感であった。

三十三年には、ささやかでも自分なりの記念碑を作り上げようと目標を立てた。対象に選んだのは和歌森太郎著「日本の歴史」。三十六年十二月、八十一巻にわたる点訳本が完成。一つの本を、一

人の点訳者が訳した日本最大の点訳本である。

第一作から、ことしの八月に完成した「漢法の臨床」まで点訳本は千七百七十七冊。頁数は十七万五千頁に及んでいる。闘病生活の間、生活を支えてきた奥さんの内助の功もまた大きい。

点訳者の育成に注ぐ情熱

点訳を通じての知人は多い。森畑さんは、病いも完全に癒え、三十七年から松橋町役場に勤務しているが、出張先など

に必ず知人がいるのに、同行した人が驚くという。「せんだって、大阪の盲人夫婦から、来年の万国博には是非奥さんと一緒に来てくれと入場券を送ってきたよ」と、森畑さんは、嬉しそうに話すのである。

三十五年には、点訳グループ「みぎわ会」を結成。毎週二回から三回勉強会を開き、森畑さんは講師として、点訳者の育成にも努力を傾けている。

三十八年には、当時十八歳であった長女の佐知子さんを目のガンのために失ったが、その悲しみを乗り越えるように、森畑さんは、毎日、退行後に、点字を打ち続けているのである。

